

日本のパフォーマンスー美術を軸として

松永康 (MATSUNAGA Ko, art coordinator)

はじめに

日本に「パフォーマンス」という言葉が登場するのは 1970 年代後半のことである。アメリカではすでに 1950 年代から、ジョン・ケージ(John Cage)の即興演奏などに対してこの言葉が用いられていたが、それが一定の表現形態を表す言葉として位置づけられるようになるのは、1970 年代に入ってからのことだと言われる。名称の統一と概念規定により、その後、欧米ではこの新しい芸術表現であるパフォーマンス・アートが一斉に広まることとなる。

こうした動きを受けて日本でも、1970 年代の中頃から既成の枠に収まらない身体表現に対し、「パフォーマンス」という呼び名が現れるようになる。1980 年代に入ると、この言葉に日本独自の解釈を加えようとする動きが起こり、美術、書、舞踊、演劇、文学といった、分野を超えた芸術家たちからその動向が注目されるようになった。さらに 80 年代後半には、この言葉は一種の流行語となり、テレビなどでもしばしば用いられるようになる。それに伴いその内容も、今日ではかなり幅広い意味で理解されるようになっている。

パフォーマンス以前

特定の様式を持たず、身体を主な表現媒体として行う芸術活動は、当然のことながらパフォーマンスという言葉が用いられる以前から存在していた。最も古いところでは、1920 年代、村山知義(むらやまともよし)らが「大正アヴァンギャルド」と呼ばれる前衛運動を展開する中で、パフォーマンスに近い表現を行っていたという記録が残っている。しかし昭和に入ると、戦争ムードとともにこうした前衛的な活動は影を潜めてゆく。

日本に再び前衛的な空気が戻ってくるのは戦後のことである。1951 年、東京で「実験工房」が結成され、美術、書道、映像等、分野の異なる若い芸術家たちが、共同して総合的な表現を試みていた。また 1954 年には、芦屋で吉原治良(よしわらじろう)を中心に「具体美術家協会」が誕生し、「ハプニング」と称した即興的な造型表現が頻繁に行われるようになる。

これらはいずれも小さなグループによる表現の実験であったが、それが一気に社会的な動きとして展開するようになったのが 1960 年代である。東京の「ネオ・ダダ」や「ハイレッドセンター」、名古屋の「ゼロ次元」、福岡の「九州派」などは、街頭における過激な「イベント」の実施によりその知名度を高めていった。彼らの多くは美術的な表現方法を基盤に置いてはいたが、それを室内で展示するのではなく、社会との関わりの中で展開させることに強い関心を持っていた。

1970 年代に入ると、こうした集団としての活動は下火となり、代わって人間にとっての個の問題が芸術上の主たるテーマとなる。よく知られた「もの派」はそのひとつの現れと言える。彼らは思索を行う契機として、表現の素材となる物質との対話を重視した。そこで物質に行為を加え、その物質が変化してゆく様を見せる公開制作などをしばしば行った。しかし、彼らはまだこれをパフォーマンスと呼ぶには至っていなかった。

「パフォーマンス」以降

パフォーマンスという言葉が日本で公式に使われるのは、浜田剛彌(はまだごうじ)らが行った「コンティニュアス・パフォーマンス」(1977)がその最初と言われる。浜田は、アメリカで盛んに行われていた概念芸術の延長としてのパフォーマンス・アートに関心を持ち、それを日本に広めようと企てたひとりであった。ここに集まったのは、鈴木昭男(すずきあきお)や吉村弘(よしむらひろし)等、当時、既成の枠に収まらない表現行為を行っていた芸術家たちであった。

1980 年代に入ると、「パフォーマンス」という芸術表現に新たな可能性を見出した若者たちは、そこに日本独自の解釈を加えようと試みるようになる。こうした盛り上がりは、1984 年から福島県檜枝岐(ひのえまた)村で開始

される「檜枝岐パフォーマンス・フェスティバル」へとつながってゆく。ここには海外からも多くの芸術家が参加しており、国境を超えた芸術のリアルタイムな情報交換の場ともなっていた。また、同フェスティバルの中心メンバーであった及川廣信(おいかわひろのぶ)は、その後も数多くのパフォーマンス関連事業をプロデュースし、パフォーマンス・アートが日本に定着してゆくうえで大きな貢献を果たした。

1980年代も後半となると、パフォーマンスという言葉が一種の流行語現象を生む。その用法の自在さから、あらゆる分野において、人の行動形態全般を指し示す言葉として気軽に用いられるようになったのである。それは、この新たな表現方法が芸術領域に核たる流れを形成しないまま霧散してしまうかのようにも思われた。

ところが1990年代に入り、日本に再び芸術としてのパフォーマンス運動が起こることとなる。霜田誠二(しもだせいじ)が中心となり、1993年に開始された「NIPAF」である。そこには、これからの芸術活動におけるネットワークの重要性と、そこで展開されるパフォーマンスの有効性を訴えようとする意思が見られる。参加者も、霜田のネットワークの厚さを活かし、世界各国から良質のパフォーマンス・アーティストを集めている。この催しは、こうした公共性の高さを維持しながら、現在も毎年積極的に開催されている。

「月尾島国際行為芸術祭」(韓国)カタログ(1998年発行)より転載



01 村山知義、岡田龍夫(1924年、東京)



02 実験工房 前列左-瀧口修造、園田高弘夫妻、福島秀子、武満徹、湯浅譲二、鈴木博義、佐藤慶次郎
後列左-北代省三、秋山邦晴、山口勝弘、駒井哲郎、福島和夫、今井直次) ;1954年



03 村上三郎(1956年、東京)、第2回具体美術展公開制作



04 ネオ・ダダ(1960年、東京)



04 ハイ・レッド・センター「首都圏清掃整理促進運動」(1964年、東京)



06 ゼロ次元 ハプニング(1970年、名古屋)



07 第2回九州派 街頭展(1957年、福岡)



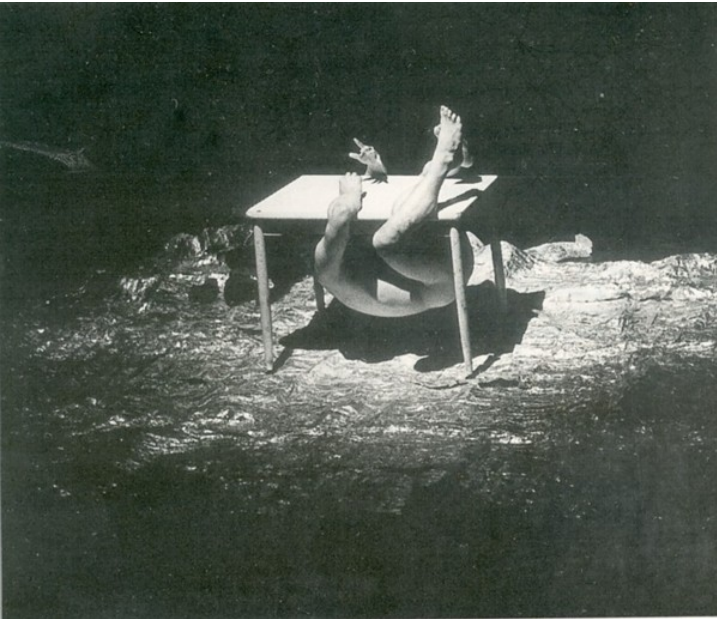
08 「穴」(1970年代、神奈川)榎倉康二、藤井博、高山登等



09 浜田剛爾「The Honeycomb Deep in Your Psyche」(1992年、Perth, Australia)



10 檜枝岐パフォーマンス・フェスティバル (1988年、福島)



11 霜田誠二《On the Table》(1995年)